

浮世絵大事典

国際浮世絵学会編 浮世絵の絵師や作品・画題だけではなく、彫摺・様式・風俗・芸能など最新の研究成果を盛り込み、幅広く収録。絵師・画家については、江戸期から近現代まで網羅。浮世絵の鑑賞、研究に最適な初の大事典。B5判 七〇八頁 定価二九四〇〇円

ROM版くずし字解読用例辞典

山田奨治・柴山 守編 ロングセラーのくずし字解読辞典と用例辞典の検索方法を同時に使える画期的な辞書ソフト発売◆詳細内容見本進呈◆価格二九四〇〇円

万葉集を知る事典

桜井 満監修 万葉の時代の社会や文化・風土・衣食住や生と死・信仰・年中行事など万葉を読むための基礎知識を解説。四〇〇余首の名歌も紹介。定価二七三〇円

風土記探訪事典

中村・飯泉・谷口著 現存する常陸・出雲・播磨・豊後・肥前の各風土記に記される古代の世界を地図・写真を多用して古代への旅に案内する。定価三九九〇円

仮名草子集成 第45巻

花田富二夫他編 本集成は厳密な校訂をもとに翻刻。第45巻には「統清水物語」「そぞろ物語」「曾呂里物語」「続著聞集」の作品を収録している。定価一八九〇〇円

東京堂出版 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-17
電話 03-3233-3741 FAX 03-3233-3746 <http://www.tokyodoshuppan.com> (価格は税込)

戦後に華族制度が廃止されるまで日本人の出自意識に影響を与えた姓氏の根源を探る！ 09年5月刊行

中村友一著

A5判上製貼函・366頁・定価一〇、二五〇円
中国・朝鮮の王とは異なり、日本の天皇は氏姓をもたなかった。現在の名字にも繋がる氏姓は、六世紀初頭に成立した日本独自の制度であり、天皇が氏姓を与え奪うことで古代を通じて民を支配した軌跡をたどる。

藤原定家と歩く八百年前の世界遺産「熊野古道」旅の苦勞を記した自筆日記を現代語訳と原本写真に

国宝 熊野御幸記

三井記念美術館・明月記研究会 共編
09年3月末刊行 B5判・カバー・241頁・定価八、九二五円

定家の心情が読み取れる自筆原本を写真と現代語訳で提供。他に翻刻・訓読・注を加えた。旅程のわかる地図・研究文献目録・最新論文六本を付す。

東京大学史料編纂所

影印叢書 第1期(全6冊・既刊4冊)

東京大学史料編纂所編 定期予約募集中！

A4判横本・上製クロス装・貼函入・揃子価一六〇、六五〇円

⑤平安鎌倉古文書集5回配本5月刊 定価六、二五〇円
「尾張国郡司百姓等解文」・源頼朝弟の範頼関係文書としては唯一現存する「源範頼下文」・皇室領荘園の様相を伝える基本史料「安楽寿院文書」等。

八木書店 出版部
【呈詳細内容見本】 *定価は本体+税5%の総額表示です。
〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-8 K係定
03-3291-2961 (FAX-6300) <http://www.books-yagi.co.jp>

4910037870599
01524

Printed in Japan

ISSN 0452-3016
雑誌 03787-5



国文学 5

特集 風土記を読む

国文学 解釈と教材の研究

平成二十一年五月十日発行 毎月一回十日発行 第五十四巻第七号 五月号
昭和二十一年九月二十五日創刊 創刊号 第一号 五月号

定価一六〇〇円 本体一五二四円

第五四巻七号 二〇〇九年五月号

特集 風土記を読む

◆風土記の魅力 三浦佑之

◆風土記に見る古代朝鮮 豊田有恒

◆野々村安浩／飯泉健司／永藤靖／秋本吉徳

◆荊木美行／松本直樹／パーマー・エドウィーナほか

国文学 5

日本語・日本文学・日本文化

一〇〇九年 第五四巻七号
解釈と教材の研究

詩人・和合亮一 連続対談企画スタート

第一回ゲスト 井上荒野(作家)

學燈社

心意伝承

—遊働世界に生きる—

ほんじょうまさかず
本莊雅一

第二〇回 尽生成死譚③ この世とあの世をつなぐ

自殺する人は履物を脱ぐ

一九九九年に日本民俗学会第五一周年会に出席した。さまざまな発表のなかでも、とりわけ興味深かったのは、川部裕幸（現成城大学民俗学研究所研究員）の「自殺の作法―履物を脱ぐ―をめぐって―」であった。この研究は後年、論文として雑誌『歴史民俗 No.19』に発表された（二〇〇一年 批評社）。自殺行動の様式に関する作法的共通性について、川部による問題提起と事例提示を以下まとめてみる。

「テレビのドラマや映画などで、高いビルや崖の上から落死者があつたとき、自殺か事故死かを判断する基準として、飛び降りた現場に履物がそろえて置いてあるかどうか、その判定の重要な要素として

（一九七八・一・二三）

「五年生少女の飛び降り自殺」

「マンション南側の鉄製非常階段の五階踊り場に、Kちゃんの紺スックぐつが置いてあり、手すりにマフラーがかかっていた。」（一九七八・一・二八）

「N商常務の飛び降り自殺」

「社長室の机の上には、S常務の時計、免許証、サイフなどがきちんと並べられ、（中略）同常務のオーバー、マフラー、クツなども社長室に残されたままだった。」（一九七九・二・二）

「電車への飛び込み自殺」

「M署は、（中略）現場にサンダルがきちんとそろえてぬいであつたことなどから、自殺とみている。」（一九七九・二・五）

「十六歳男女の飛び降り」

「屋上には、飛び降りた二人のものとみられる運動靴とサンダルが、そろえて残されていた。」（一九九七・七・一三）

「母子三人無理心中」

「十一階の渡り廊下に、ハンドバックと三人のものともみられる靴三足がそろえて置いてあつた。」

取り上げられることがある。なぜ、このようなことが、自殺か否かの判定基準となるのであろうか」

「いわば『自殺の作法』のようなものが、暗黙裡に定着していて、広く承認されているからであろう。」

（日本民俗学会第五一周年会レジュメより）

これについての朝日新聞の自殺記事の事例を、川部は次のように列挙している。

「女子高生飛び降り自殺」

「十四階と屋上の間の踊り場にカバンとクツがそろえてあり」（一九七八・一・二〇）

「船長の飛び降り自殺」

「K署の調べでは、病院の階段の三階踊り場にTさんのスリッパが並べて置いてあり、Tさんはここから窓を開けて飛び降り自殺したとみている」

（一九九九・一・一〇）

「アパート屋上から男性が転落死」

「屋上には運動靴がそろえてあり、そばには遺書らしきものが入ったリュックが置いてあつた。警視庁S署では、男性が自殺を図つたものとみて調べている。」（二〇〇〇・五・三〇）

（太字、傍線は筆者）

また、川部の引用する『自殺百態』の著者榎引信利も、長年の刑事生活、刑事調査官生活を通じて多くの自殺死体を取り扱い、やはりこうした不思議な符牒を目的の当たりにして頭を抱え込んだらしい。「自殺者の大多数が、列車への飛び込み、高所からまた水中への身投げ等いずれの場合にも必ずといってよいぐらい、履物を脱ぎ、しかもきちんと揃えておくことがある。この心理はどうしてもわからない」と彼は述べている（榎引信利『自殺百態―ある刑事調査官の記録―』一九八七年 立花書房 三一頁）。

確かにここまで揃うと「作法」と言いたくなる。しかしこれは、特に家庭でも学校でも私たちが意図的にしつけられたことでなく、社会通念として流布する情報でもないのである。ほとんど無意識裡に知ってしまった

様式としか言いようがない。

しかもこれは同時代の日本人の間でのみ、共通していることではない。実は歴史的にも同様の「作法」が、あたかも遵守され続けたかのごとくに行なわれていたと、川部は指摘する。

たとえば一六八六（貞享三）年成立の、井原西鶴「好色五人女」第三巻おさん茂右衛門の第三段「人をはめたる湖」に次のような場面がある。

「二人都への書置残し、入水せしといはせて、この所を立ち退き、いかなる国里にも行きて、年月を送らん」と話し合い、おさんと茂右衛門はそれぞれ「遺書」を書いた。それにおさんは、身につけていたお守りと黒髪をひと束切り添え、茂右衛門は愛用の脇差を残す。こうした「形見」のほかに、「二人が上着・女草履・男雪駄、これにまで気を付けて、岸根の柳がもとに置き捨て」、雇った漁師二名が水に飛び込む音を人々に聞かせて入水を偽装し、駆け落ちする（井原西鶴集 一「日本古典文学全集 小学館 太字は筆者」）

こうした状況設定が自殺の判断基準となることを、すでに証し立てているわけである。

とあるという。

以上のすべてが、川部裕幸によって指摘された資料である。

これぞまさに心意伝承、と言える。誰に教えられたわけでもなく、無意識の次元で伝わっているとした言いようのない行動様式である。この根っこでは、時代を越えて、同様の心意がはたらいたことを意味する。憎悪する者へ靴を投げつけるのとは対照的である。こちらはむしろ履物を残して我が身を投げるのだ。

かといって自殺を擁護するのではない。人生の窮極の場にあつてなお、否、窮極であるからこそやむにやまれぬ心象心意に、素直に従ったかれらの最後の「生きざま」に関しては、残された者は厳肅に受け止めねばなるまい。

それにしても、なぜ履物を残すのだろうか。

川部は、神聖な領域に入る時に履物を脱ぐ宗教儀礼や習俗に着目し、そうした場合の意識と、死後の世界へ移行する人の意識とを関連付けて論ずるが、ここでは別の観点をとってみたい。

この意識伝承は少なくとも中世まではさかのぼれる。応安年間（一三六八〜七五）成立とされる『太平記』に、

母ト二人ノ少キ者、互ニ手ニ手ヲ取組、思出河ノ深淵ニ身ヲ投ゲルコソ哀ナレ。（父親の）兵部少輔ハ、（中略）先ノ川端ヘ行テ見ルニ、母・少キ者共ガ著タル小草鞋・杖ナンドハ有リテ其人ハナシ

（岩波日本古典文学大系『太平記』三 二五〇〜二五一頁 太字は筆者）

と述べられている。

また、南北朝時代（一三三六〜一三九二年）の成立とみられる『源平盛衰記』三巻「澄憲雨を祈る事」に、

過ぎにしころ、比叡山に候ひける兒の夜の間に失せて見えざりければ、（中略）方々を尋ねける程に、辛崎の海に身投げたりと聞きて、師僧罷りて見れば、裏なし（草履の一種）を脱置きたる処へ、二三度ばかり往環りたる跡ありて、終に沈みたりける（下略）

（池辺義象編『源平盛衰記』博文館 一九一四年 八六頁 太字は筆者）

この世とあの世との関係を結ぶ

たとえば、テレビアニメ『妖怪人間ベム』（一九六八〜一九六九年 フジテレビ）の最終回。実は最後のシーンだけ強烈に覚えていて、どんな話だったかは全く思いだせなかったの、今回あらためて、ネットで見た。

とある館に閉じ込められた人間たちを救出した妖怪人間ベム・ベラ・ペロが、その功績を理解しない警察隊によって包囲され、館は火をかけられ、炎上した。燃え尽きた館跡には、ベムの帽子、ベラのマント、ペロのクツが残っていた。

最終回だからといって特別、劇的なクライマックスがあるわけがなく、突然終息する感じであった。しかし、最後の焼跡のクツだけは、幼い時の私の記憶に深く刻印されていた。帽子やマントまでが残っていたことすら、忘れていたのに、である。

また宮崎駿監督のアニメ映画『となりのトトロ』（一九八八年 スタジオジブリ）。行方不明になった妹の「メイ」を探し回る「サツキ」は、村のおばあさんから、たぬ池に浮かんでいたという小さな、女の子向けのサンダルを見せられる。サツキの反応を、大人たちは固唾を呑んで見守る。「ちがう、メイのじゃない！」サツキのそ

の一言で、みな安堵する。

つまり、残されたサンダルが「メイのもの」であれば、「メイに何かあった」と、意味したことになる。

身につけていたものが残っている。それが履物であることが頻度としては高いが、その人の靈魂がより濃厚に附着しているものであれば、形見（＝形身・片身）すなわち分身としての資格は十分にあった。その残り方というか、名残の表情が、持ち主の生死のさまを教えてくれるのである。

いや、もう一つ踏み込んで言えば、履物などが残されている（持ち主から切り離されている）ことが、履物（この世）と持ち主（あの世）という、関係が発生したことを告げていると、思い知らされたのではなかったか。そのような意識を日本人は催してしまうのではなからうか。古来から伝わってしまっているのは、そうした世界複合の発生意識ではないか。

つまり自殺する時にこうした、わが魂のいちじるしく染みついたものを残すことは、我が身を投棄する世界とこの世との関係を作ることだと考えてみたのである。というのも、幼い時に見た『妖怪人間ベム』の結末だけ忘れられなかったことに、関連すると思うからである。例えば強力な敵と戦って命を落としたとか、何かのた

自殺者に「隠された生」との関係が生じ、残された者を逃れようのない複合世界にからめ取る。こうした、存在世界についての感性を、私たちは持つてしまっているのである。

あらざらむ この世のほかの 思ひ出に いまひと
たびの あふこともがな

（和泉式部 『後拾遺集』恋三 七六三）

説明は要すまい。会いたくても会えずしてこの世を辞す。そうならざるを得ない場合もある。しかし何としても、もう一度会いたい、そんな思いに焦がれる人がいる。愛する人はもちろんだが、一太刀浴びせたいほどに憎悪する人、というのも含めて考えるべきだろう。清算しきれない残心や残念を、例えばこんなふうに歌に詠んで形にすることで、これまで縁がなかったものとも最強の関係が結ばれる。そういうふうには、私たちは知っている。また、求めているのだ。

親の敵は「善知識」

こう考えてくると、以前から不思議に思っていた『曾我物語』の一場面に関しても氷解してきそうな気がす

めにわが身を犠牲にして死んだとかいう、よくある結末ならば、感涙にむせて完結の安心感に浸れただろうが、帽子や靴が残っていたというのでは涙も出ないし何とも安心できない。死んだのか生きているのか確たる決着がつかない。しかしこの世とこの世ならざる世界との関係は自分の意識のなかに濃厚に刻印される。まるで、果たそうにも果たせない約束がいつまでも気持ちの楔にも忘れてられない強烈な脈動が、その関係性には残り続けるのである。

自殺には死という決着がついているとも見える。しかし、生き残った者の素直な実感にとつては、そうではない。

本来なら運命や寿命による死があり、それに至るまでの生があったはずのところ、そこを自殺者によって隠されてしまったと、残されたものは感じ取ってしまうのである。「自殺だってその人の寿命がそこまでだったというにすぎない」という理屈も出せるだろうが、それはあくまでも理屈であって、実感ではない。九十歳百歳まで生きて往生を遂げた人を送るのと同じ実感で、自殺した人を送ることが私たちにできるだろうか？

形見が残ることによって、この世と、あの世もしくは。家督争いのこじれから伊豆の豪族伊東祐親の嫡男河津祐泰が、父祐親のいとこにあたる工藤祐経の放った刺客によって、射殺される。

このときまだ幼児であった祐泰の遺児たちのうちの二人が、母親の再嫁先の曾我家に引き取られ、長じて敵討ちを成就するのである。

ところがその敵討ちに先立って、弟の五郎時致が、父の敵である工藤祐経について、ほとんど信仰対象ともいうべき敬意を表現するシーンがある。『曾我物語』巻第七「鞠子川の事」の場面である。いわば肉親を殺害した犯人を神仏のように崇敬するわけで、およそ私たちの理解とも実感ともかけ離れているような気がしたものであった。「心意伝承」ここに崩壊せりとも思える事例だ。まずは見てみよう。

一一九三（建久四）年五月、源頼朝が富士のすそ野で巻狩りを行なうことになった。曾我兄弟の父親の敵、工藤祐経も参加する。敵討ちの機会をうかがっていた兄弟は、これが最大のチャンスと決死の覚悟を決め、見物を装って富士を目指して出発する。

曾我の里を出て鞠子川を渡るとき、兄十郎祐成が言う。「幼いころからこの川を渡るとは際限もなく繰り返

返してきたが、此度がこの川の渡り果てになるのだなあ。どうしたとか、いつもよりこの川の水が濁っている。心もとないことだ」と不安な様子。それに対して弟の五郎時致が言うには「人が冥途におもむくときは、物の色が変わって見えるという。曾我の里を出ることが、娑婆への別れ。この川は三途の川、湯坂峠は死出の山、鎌倉殿（源頼朝）は閻魔王、御前祇候の侍どもは獄卒阿防羅刹、左衛門尉は善知識、箱根の別当は六道能化地藏菩薩と念じ奉る。この川の水、色変わって見えるは必然のことだ」と凜とした態度で馬を流れにうち入れる。

やあつて十郎が歌を詠んだ。

五月雨に浅瀬もしらぬ鞠子川波にあらそふわが涙かな

（五月雨のために浅瀬もわからない鞠子川を渡るにつけて、その波とくらべられるほどにわが涙を流すことである）

五郎はこれを聞いて「歌の体」がよくないと思い、行膝（毛皮のスカートのようなもの）を鼓のように打ち鳴らしつつ、

わたるよりふかくぞたのむ鞠子川親の敵に逢瀬とおも

へば

（鞠子川を渡るにあたって、深く頼みとする心がおこることである。この川の瀬のように、やがて敵に

逢う瀬（機会）があると思うと）

と詠じた。（岩波日本古典文学大系『曾我物語』二九九〜三〇〇頁 歌意は頭注による）

うっかり読み飛ばしてしまいそうだが、途中、「左衛門尉は善知識」とあったのに注目しよう。左衛門尉とは兄弟の敵工藤祐経のことである。「善知識」とは人を導いて仏道に入らせる高僧のこと。つまり迷える衆生を救ってくれる存在というわけである。

ここに近代合理主義とはかけ離れた心意、智慧が潜んでいるように思われる。

現代的なイデオロギーや価値観を度外視して純粹に論理的に読むならば、父親の敵の工藤祐経とは、五郎の歌にも表れている通り何としても討ち果たすべき対象であると同時に、兄弟を仏道に導く恩師ということにもなっている。鞠子川を三途の川、源頼朝を閻魔王にたとえる五郎の一連の発言は、曾我兄弟が負の存在・悪人である、地獄に落ちて閻魔王の前でさばかれようとするところを、工藤祐経がそれを救ってくれる恩人であるとして、敬う気持ちさえ物語っているのである。

幼い時に父親を殺害されて、その敵を討つという構図は現代人にもわかりやすい。しかしそれだけではない。込め、所領のほとんどを、水草の子工藤祐経に相続した。祐経が死んだあとは、当然のごとく嫡流伊東祐親の復讐が始まる。工藤祐経病没後はその子工藤祐経を京に出仕させ、その間所領を横領する。本来は自分が相続するべきものだったという論理で。工藤祐経にしてみれば、親の代の経緯はともかく、正式に自分に相続されていた所領を一方的に没収されたうえに、妻であった祐親の娘とも離別させられる。当然祐経からの復讐も始まる。もともと祐親を標的にしていたのだが、たまたま祐親の子、河津祐泰の方をしとめることになった。繰り返すが、河津祐泰の子たちのうちの二人が、曾我兄弟である。

こうした因縁語りによって、曾我兄弟の血脈自体に、そもそも素行上の問題があったということを示している。工藤祐経も被害者の資格が十分にあったと、主張しているわけである。

が、これらはいくまでも表面的な因縁を解説して、曾我兄弟の時にいたって大きな事件が起きることを、多少なりとも合理性を持たせ、つじつまをわかりやすくしてみたいすぎまい。史実もあるかもしれないが、あくまでも文芸上の演出が勝っているとみるべきである。

つまり、被害加害の因果関係が複雑に絡まりあっては

構造連関を、曾我兄弟の物語を伝承する古人は認識していたわけである。言いかえれば、兄弟がすでに何らかの業を背負っているという見方である。一体、どんな業なのであろうか。

それはすなわち、非業の死に見舞われる眷属を持つという、罪業である。

現代感覚からするとずいぶん理不尽な罪業ということになるが、『曾我物語』の論理はここに帰着せねばならぬ。

河津祐泰殺害の実行犯を差し向けた工藤祐経が黒幕であり、幼い兄弟には何の責任も罪もないはずであるが、「責任能力のない個人」の生き方にかかわらず、その血統自体に付随する罪業を、古人は思わずにいられないのだろうか。

『曾我物語』は、それでもまだ説明的なほうである。曾我兄弟と工藤祐経は同じ祖先をもつ縁戚関係にあるが、伊豆国を領有して伊東姓を名乗りだす祐経の代にさかのぼって、両家が対立相克する経緯を説いている。祐隆の夫人病没後の第二夫人には、「水草」という連れ娘がおり、祐経はその水草にまで手を付け、子を産ませる。工藤祐経である。水草におぼれた祐経は、嫡男祐家が早世すると、その未亡人と孫の祐親を河津の館に押し

いるが、そうした細々とした「事実」らしき話は、ストーリー構成の飾りにすぎない。大事なものは曾我兄弟の霊験を物語るにあたって、彼らの血が抱えている、「原因」不明の罪業をクローズアップさせ、その襖袂をする展開を、日本人は必要としたのだ。それが鞍子川渡渉の場面に託された意義であつたらう。

そうしたことを、まことしやかな理屈付け抜きに、ストレートに表現しているのが、江戸時代の歌舞伎である。

文政五(一八二二)年正月初演の『御攝曾我閨正月』(瀬川如臈作)は、今も「曾我の対面」の通称で正月恒例の演目となっている。この芝居では、高座にでんと居座つた工藤祐経のもとへ、曾我十郎、五郎兄弟が面会を求めて推参するが、寛容な祐経によつて特別に目通りを許される。

この芝居はどう見ても工藤祐経が主役である。設定上は、主君源頼家を自宅に招いて上座に据えかきしていることにはなっているが、舞台の中央で客席を見下ろすように座るさまは、祐経がこの劇場空間における御本尊であることをはっきり示す。

招かれざる客の曾我兄弟を快く招じ入れ、その成長ぶりをほめ、盃をふるまう。血気にはやる五郎時致を、実

くて、例えばかぐや姫が月の世界で「何らかの罪」を犯して、ひと時この人間界にやつてきたように、具体的な罪の内容は不明だが、要するに特殊な資格を与えられて特殊な霊格へと研磨されるめぐりあわせに生きる運命(「生命運動」)が、曾我兄弟の物語や芝居のエッセンスだと思われる。

これ、と具体的に指定できるようなものごとではない。だから本質的には「罪業」というものですらない。にもかかわらず仮に「罪業」とでも呼んでおくのがふさわしいほどに、あるいは「前世の報い」という言葉が思い浮かぶほどに、曾我兄弟の人生にはこれでもかと苦難や不幸がめぐりあわせられる。

そうしためぐりあわせの果てに、敵討ちの成就と、その現場である富士の裾野の狩場、おりしも五月雨そぼ降る夜闇を舞台とした、二名対多数の武士たちとの闘争が展開する。「十番切り」として史上有名だが、殺傷されたものうち著名な武將十名が記録に残っているだけで、おそらくその他の従者雑兵も含んで、数十名以上ものつわものたちが殺傷されたのではあるまいか。そうであれば、五郎が源頼朝本陣に乗りこむまでの間、途中で十郎を討ち取った新田四郎忠常を含めても、防戦しようとした者が十一名しかいなかったことになる。ありえ

は偽物と見抜いたうえで成敗し、幼年期に五郎が犯した罪を、頼家の面前で帳消しにしてやるという粋なはからいまで見せる。さらには十郎祐成に引き出物を与えてその場はお開きとなるが、最後に工藤祐経は「五月雨の時節に裾野で会おう。兄弟そろつて本意を遂げよ」と意味深な言葉を残す。その後十郎が引き出物を開けてみると、それがなんと、工藤祐経が曾我兄弟に討ち取られる運命にある、五月の富士の裾野の狩場への入場券なのである(『日本戯曲全集第十四巻 曾我狂言合併集』七九六〜七九九頁 一九二九年 春陽堂)。

観客のすべてが結末はわかっているのに、あえてわが命を兄弟のために与える振る舞いをするかのような工藤祐経が、どこまでも神々しい光を放つことになる。「曾我物語」で、工藤祐経を「善知識」とみなす古人の心意に深く共鳴しているがゆえに、時代が下つてこうした芝居が、よけいな説明抜きにここまでエッセンスだけをばでやかに強調した形で成立したと考えられる。

そのエッセンスとは何であろうか。

個人ではなく、血統そのものが負つた、「非業の死に見舞われる眷属を持つ」という、罪業」と先ほどのべた。ただしこれを「原罪」とは言いたくない。何か固定的・絶対的なものを意味してしまうからである。そうではな

ない。暗闇のなかでの騒ぎだから同士討ちも起こつたであろう。大混乱のさなか、五郎が頼朝に一太刀浴びせる寸前で、ようやく取り押さえられ、後日処刑された。あわや時の征夷大將軍が、たつた二名の若武者のために討ち果たされたかもしれないという、日本中のつわものたちを震撼させた、というより熱いものを全身に走らせた大事件であつた。

当然誇張もあるが、弱冠二十歳すぎの若武者たちの金剛力と、五郎と御霊との音通から、即座に彼らは富士の狩場の御霊神として祀り上げられる。こうした神威示顕という結果に至るために、すべてのこれまでの状況は配列されていたと、古人は感じ取つたに違いない。祖先伊東祐隆に始まる、骨肉相食む所領争いの因縁は、曾我兄弟信仰を物語るための、筋書きの一つが定番となつたに過ぎまい。

命のやり取りをする「逆縁」も、最高の出会い

実は北条時政が仕組んだ頼朝暗殺計画であつたとか、さまざまな解釈がなされる事件であつたが、この際、「理解しやすい解釈に逃げる」のはいさぎよくやめてしまおうではないか。不明なことは、不明なままでよかる

う。了解できた気になりやすいこじつけを、きつぱり放棄する。コンステレーション理論の最大の長所がそこにあると、私は思うのである。

そうしたなかで、少なくとも、工藤祐経と曾我兄弟との関係だけは、命のやり取りから逃れられない、強い縁で結ばれている。いわばこの物語の生命指標である。曾我兄弟が工藤祐経を「善知識」と見立てる場面があったり、芝居の対面の場で、祐経のもとに兄弟が参拝するようにならざるを得ないを披露しあうのも、互いの霊威の発動と成長のため、もつと一般化して言えば、それぞれの生きざま死にざま成就のため、たがいに必要不可欠という関係を取り結んだことを表しているのではなかったか。

最も愛する者ばかりでなく、最も憎悪する者とのギリギリの命の駆け引きをすることが、味わい深い人生の奥義に触れさせてくれる。これは私たちの人生においても、「最強の敵は最良の友」と言われるように、食うか食われるかの敵こそが、生きる喜びや実感をもたらしてくれるのと同様なのである。

実践的武術研究家の甲野善紀（おののよりのよしき）ふうに言えば、「逆縁」すなわちどちらかが命を落とす出会いの最高形態（『表の体育 裏の体育』二〇〇四年 P H P 文庫 六〇頁）という人間関係もまた、愛しあつたりいたわりあつたりす

るような「順縁」と同様に、生命燃焼の貴重な機会として味わうべきと言えよう。考えてみれば、ライバルとの対決をモチーフにした少年漫画のほとんどすべてが、こうした実感を脚色したものと云ってよい。

現代において自殺する、死ぬということを選び実行する心理は、本当のところはわからない。ただ、少なくとも、履物などを残してこの世を去ることで、残されたものとの間にどうあがいても断ち切ることでできない関係が生じ、そうした関係性が、深刻かつ浅からぬ作用を、生きる者の人生に及ぼすことは、きつと予感したはずだ。自分ひとりだけの単線的な生活ではなく、複数の人々の人生のなかに生き続ける、複線的な生活と云える。自殺する人の計算ではなく、ある種の「生き方」の選択である。

不幸な選択ではあるが。

自殺防止を呼び掛けたり命の尊さをスローガンとしてかかげるだけでは、死を選択してしまう人々の「曼茶羅」を、この世の地上に取り戻しはめ込むことは不可能ではないのか。

対症的に、自殺を思いとどまらせ人生をやり直させることに成功した事例も多く紹介されている。しかし一九九八年以降十年にわたって年間自殺者数が三万人

を越えているという事態、すなわちこの十年で三十万人以上が自殺しているという尋常ではない現実を考えるなら、根本的な問題は、何も解決されていないに等しい。

思うに、例えばサンカのような山民（やまびと）、家船生活者のような蛋民（たまびと）、そうした人々のように、制度外の生活圏に生きるということを、否定してしまう世の中が、制度内の生き方に適応しない曼茶羅（マンダラ）にある人を、むしろこの世からはじき出しているとも言えまいか。制度内での能力主義が、人々の生きる世界の幅と奥行きを、ひたすら狭めてしまっているとは言えないだろうか。

景気後退や金融恐慌、失業率の上昇といった経済危機と、自殺者数の増加とが強い相関関係にあるという説明は確かにわかりやすく、説得力もある。しかし全世界的に同様の危機的状況にあつて、日本が飛びぬけて自殺率が高いことの説明にはなるまい。先進国八か国のなかにあつて、日本の自殺率は、ロシアの三九・四パーセントに次いで、二四・一パーセントの二位なのである。三位以降のフランス、ドイツ、カナダ、アメリカ、イギリス、イタリアに、二〇パーセントを超える国はない。おおよそ一〇パーセント前後である（「自殺対策支援センターライフリンク」ホームページより）。

日本の、というよりも、この列島風土に生きる人々に

とつての生活世界のありようを、根本から問い直さなければならぬ。風土の持つ風合い（ふうあい）を無視した制度の鉄条網が、多くの人々をはじき出す。人々からその生活世界を奪い、本来の死をも奪うことが許されないのは当然であるし、また「奪う」側にあつた者が自業自得に陥る喜劇を伝承し続けるのも、新しい生命たちのためにも断たねばならない。これは私たちの責任である。

こうした責任を忘れさせないために、この世を去る人は履物を残し、辞世の言葉を遺し、消し去ることのできない霊的関係性を張り巡らせるのである。